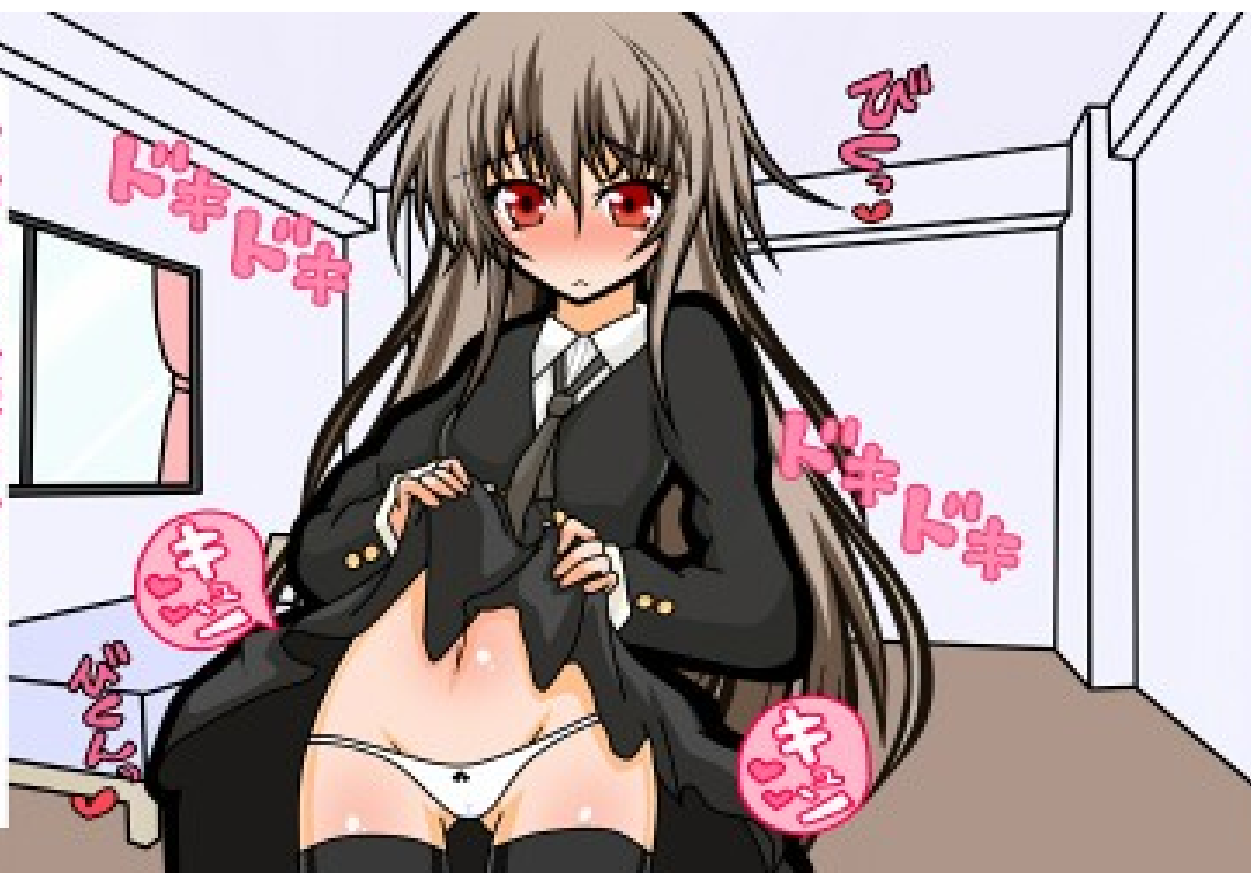






「うんうん」
「ああ、ああなうんうん」

「中っ・中いまま前なにやってま？」
「だっ・だって前・サッ結してでしよま女の子付
駄すけしきうにスカーフを捲り上げるポーズが
きもってま」
死ねるの俺。



「はへっ、はへええ、おっおしり……れびい」
「めっ、抜いて、もう入らにやびい」
「ああ、じや一気にいくぞ」
「びえ……ちゅっ、ちゅっく……」



「はへっ、はへええ、おっおしり……れびい」

「めっ、抜いて、もう入らにやびい」

「ああ、じや一気にいくぞ」

「びえ……ちゅっ、ちゅっく……」

「オシリの穴で汁液庫をくたさ回すのはおかし」
「……あれは、あれだ」
「……はいはい」
「いくらなんでも」





鬼瓦 源司
俺の名前である。
顔やら目付きやら体つきやら、もろもろ敵つい俺にはびったりな多前
なのだろうが……
せめて多前だけでも、もうちょって柔らかい響きだったなら、もう少し
近づき易くもあったのではないかと思わなくもない。

まあ、こんなナリだし、降りかかる火の粉は振り払う主義だ。

不良だなんて言われた所で甘んじて受けよう。

(勉強は頑張っではいるが成績は振るわない)



まあ、どうでも良い俺の話はこんな所でいいとして、こんな俺にも友達と呼べる奴は一人居る。

月村 唯 ツキムラ ヌイ (●○)

小学校の頃、気弱で優しい性格が災いして虐めの標的にされかけていた所を助けたのが切っ掛けで……なんだがんだで、それ以来の関係だ。



だが……



「おい、コイ。今日で一週間も学校休みって前、どう言う事だ？」
「病気なのか？ 見に来てみれば、部屋からずっと出てきて無いって前
の母ちゃんも心配してんじやないか？」



「ゲッ...」
「ん.....?」
(なんか、やけに声が高いような)
「お願い、帰って」
「お前.....もしやして、また虐められてんのか?」
「え.....?」

「別に、いじめる側だけが1の%悪いだけ、虐められる側にも非があるだけ……そーやーアホみたいな事は言う気はないが……」
「一人でグダグダ悩んでるんじゃないやねえよ！友達だろうが！！」



「ちが……♡?」
そんな声が聞こえてきた頃には俺はドアを蹴り開けていた。
そして中に居たのは見慣れたコイの姿……ではなく。



「あ……あう……う……」
「……アイツの面影を持った見た少女の姿だった。」



「間違えました」ボタン
「あれだけ豪快に熱く入ってきておいて開めないでよゲン?」

「いや、いやいやいや、まて俺はお前なんて知らないぞ？ アイツに
妹が居たなんて聞いてないし、あれが？ 従兄弟とかか？」
「そうじゃなくてさっ！」







「TS病……ねえ」
「そんな全くもって信じてないって目で見ないでよ！ボクだって半信
半疑なんだから……」
「いや、あまん……」
まあ確かに見てみればアイツの面影がまったくないって事も無いんだ
が……

「……………こんな誰にもいいだせなかつたし、ゲンだって気持ち悪いって思っちゃうよね……」
「なっ……お前なあ、俺を見くびるのもいい加減にしてあげよ？」
「俺はなあ……！たてえお前がでんな姿になった所で、んな下らない理由でお前の扱いを変えたりなんかしねえ！！」

「ゲ……ゲン……ううっ、ありがて……」
「ああもう泣くなって……」





で、大見得を切ったのが一週間前…

「おえ、ゲンいっしょにやえろっ！」

「ゲン、スマ●う発売したわけだし徹夜で対戦しようよ！泊まりに
いっていい？」

「おえゲンおわけい！一人で服買いにいくの怖いし着いてきてお願い
い！わっ？」



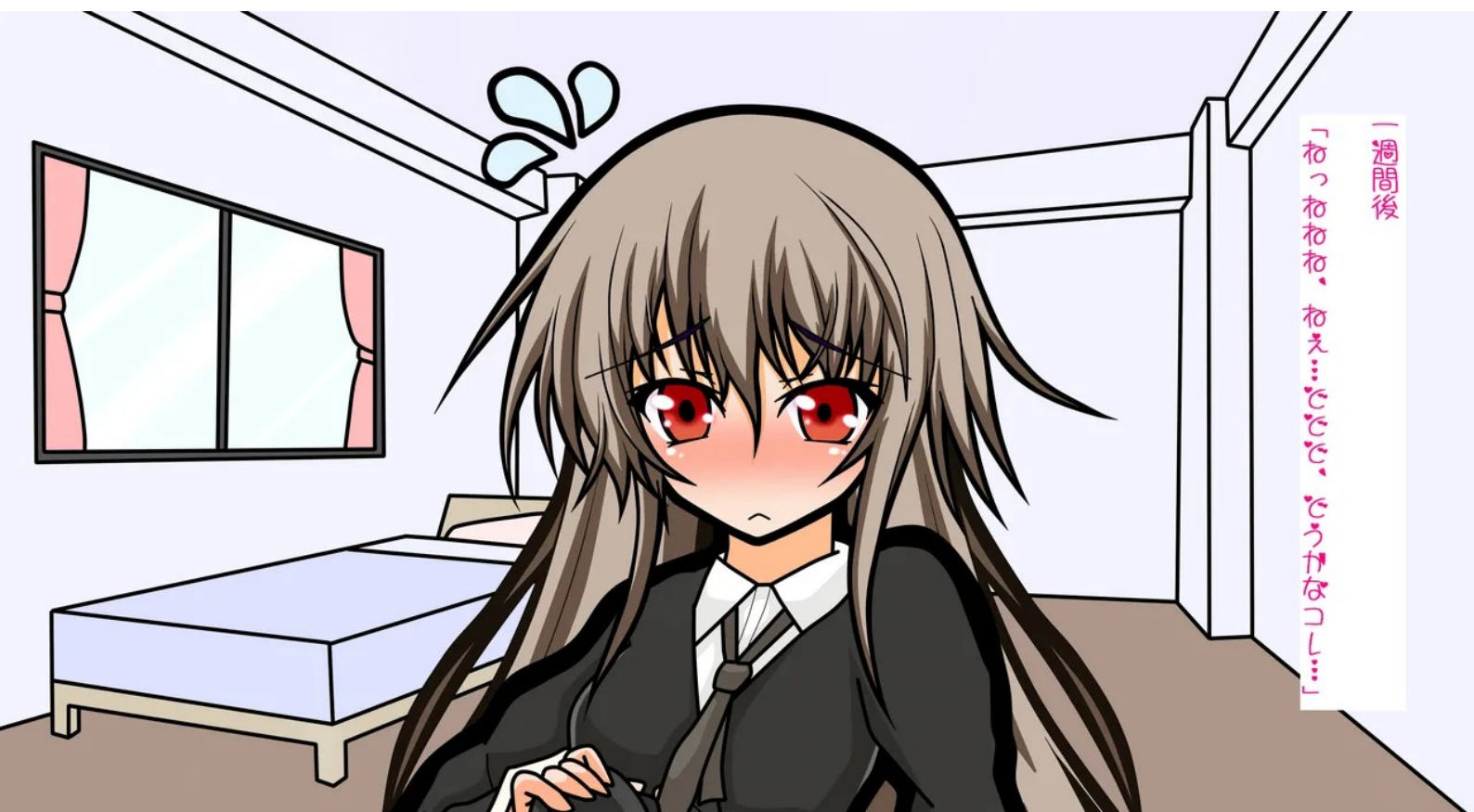
早くも掛けようぞ

「何だあの可愛い生き物は！男の頃もあんな感じではあったが
……♡」
「それにしても無防備すぎるだろうなあ」



一週間後

「ねっねねね、ねえ……ででで、どうかなっし……」



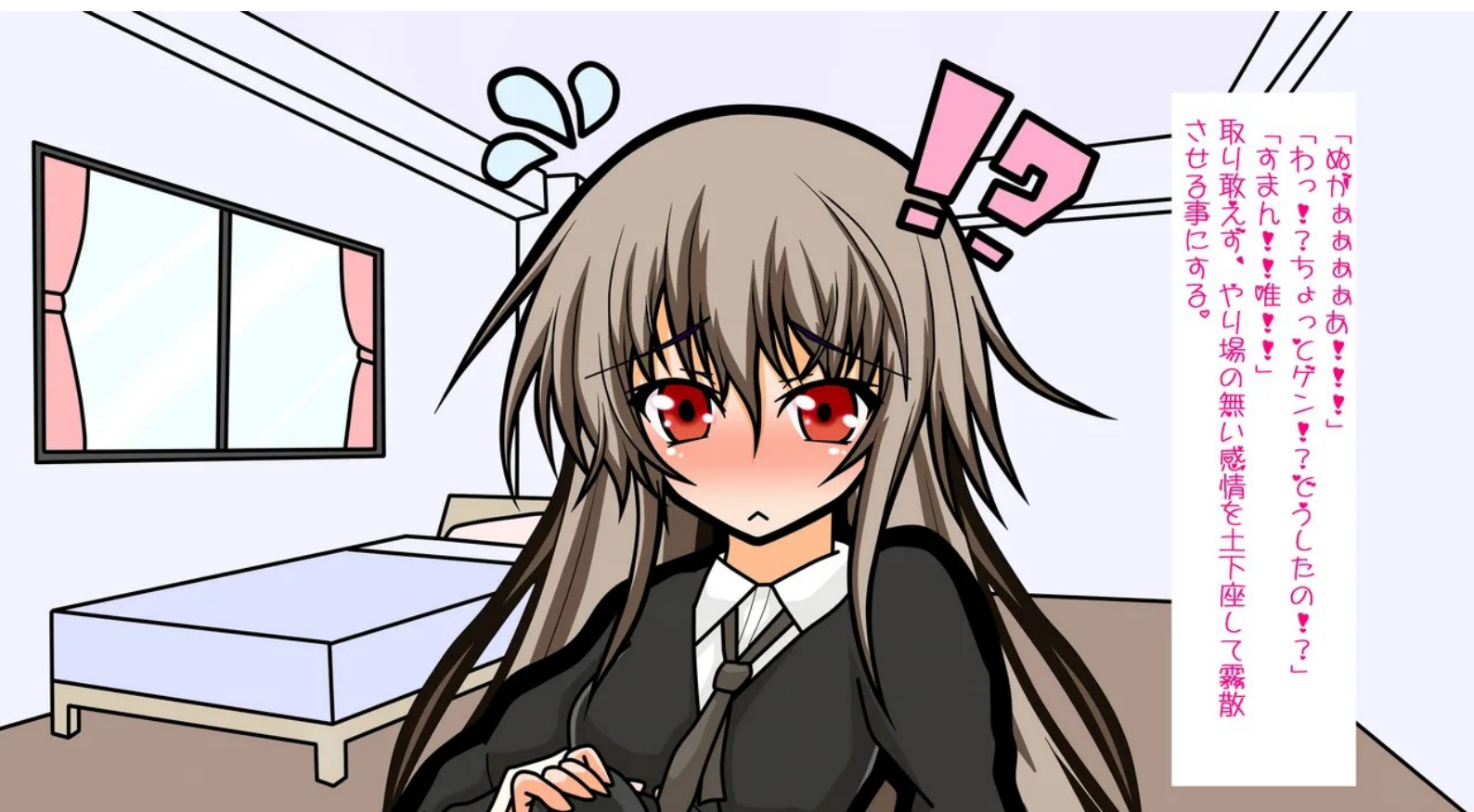
流石にいつまでも男物の制服という訳にはいかな
いので、頼んでいた女ものの制服がやって届いた
らしいのだが……
わざわざ呼び出して着て見せてくるか！？しかも
俺だけに！

「あっ……ああ、いいんじゃないか？」
正直、ただでさえ、女の子としか見えない外見で
そんな事されるのは、そのだな……





「そっ、そうかな……えへ、良かった。ゲンに
そう言って貰えて。これなら安心して学校にいけ
そう……」
あ、うん駄目だわ。



「ぬがあああああ♥♥♥」
「わっ♥?ちよってゲン♥?どうしたの♥?」
「すまん♥♥唯♥♥」
取り敢えず、やり場の無い感情を土下座して霧散
させる事にする。

「えっ？えっ？えっ？ちよちよちよって、頭あげてよゲン！どうしたの？」
「いや、そのだな、お前はお前だてかなんてか、格好つけた事いってその非常になんていうか、情けない話なんだが……」
「いや、お前はお前だし、その気持ちは今でも代わりないんだが……」



「いまのお前は見た目は正直、そのだな非常に俺の好みと言うかなんていうか……その、な……」
「そっ……それって……」
「……ああ、うん悪い。正直女として意識しちまってる……」



「やっ！でもだな！今はまだお前の変化に
応えてないだけで、もう少し時間がたてば慣れ
てまた何時も通りになると思うんだ！」
「だから、その…それまで、お前にも嫌な気分
にさせちゃう事があるかもだが…そのま
ま……」

正直、今一番戸惑っているのは唯なんだろう。
そんな唯にこんな事を言ったら余計に傷つけてし
まうかもしれない…
ただ、俺はそんな気持ちを隠し通せる程器用な男
ではないのだ。それなら、例え唯を傷つけてしま
うとしても、せめて傷が浅い内に……



「ゲ…ゲン」
「ああ、あまな…い♥?」

「ゆっ、ゆい♥?お前なにやって♥?」
「だっ、だっ前、ゲン話してでしよ♥女の子が
恥ずかしそうにスカートを捲り上げるポーズがそ
ろって♥」
死ね昔の俺。





「ゲンがボクの事、今の姿、好きだって言うから
……ボクなんかでも、ゲンの事、喜ばせてあげら
れるかななんて……その」
「ぐっ……そりゃ、正直ぐっでは来るけど……
お前の気持ちも考えずに……」
「いいよ……」



「ん？」
「ゲンなら、いいよ……いつもゲンに助けてもらってたし……それに」
「ゲンなら全然いやじゃないから……それにどっちかっていうと、今、凄いだキドキしてて……」

ああ、うん、もうだめだわ…我慢できる訳がねえ…



「ほら、ゲンが好きだって言ってたセーラ服だよ」
「お前、こんなのも買ってたのか...」
「えへへ、ゲンが喜びそうだなって思ったらついね」
「ほかに色々買ってあるけど...」

「本当に、オナニーみせるだけで良かったの？ゲンに
なら、なにされたって…」
「バカ……そんな事、ある程度馴れてからじゃないと
俺のが死ぬ」



チキンハートを嘗めるな。
「それ、威張って言ってるの……?」

「まあ、それにお前に無理もさせたくないし、途中で
とまる自信もない」
「そっか……ありがて」

「で、お前、その体になってからしたことがあるの
か？」
「あっ、ううん……正直、こわくてまだ……」



「ま、当然だよな…いいんだぞ、無理しなくて。まだ
今なら冗談で済…」
「やだ」



ああ、そう言えばコイツ、わりて言い出したら聞か
ないんだっただな…
「それでも、やっぱりゲンは、こんな身体気持ちわる
い…?」
「……っ！バカんなわけ無いだろ！現に今だってお前
みてこんなになってるわけ…」
下半身は正直である



「なら決まりだね、ボクだけにさせるのが、あれなら
ゲンのモボクにみせてよ」
……はめられた



「じや…じやあ…いくぬ…」
クチユッ
「~~~~~」
コイが軽く手を突っ込んだだけで身体をじくじくと仰
け反らせる



「じや…じやあ…いくよ…」
クチユッ
「~~~~~」
コイが軽く手を突っ込んだだけで身体をじくじくと仰
け反らせる



「しゅっ、しゅっ……なにこれ……男の時て全然比べ物にやならにやい……」
「んひ……はへええ……へ、へんにや声でちやみうろ」
「わっわえ、ゲッ。どう、興奮する……？」
「ああ、滅茶苦茶興奮する……」

「そっか、よかった……あひっ……はへっ……嬉しい……」



「こんなの変態だよわ……ゲンにおまんこ、クチユク
チュ弄ってる所みられて気持ちいいなんて」
「でも、おまんこ気持ちよくて……指がまんこにやいの
……あへっ……はへえええ」

「もって見てええ、頑張っておまんこくちゅくちゅ
りゅかりやあゝ」
「エッチで変態な姿みて、もっておちんちんシコシコ
してええ」



「あっ...あっ...だっため、いくっ...♡いっすやう
」



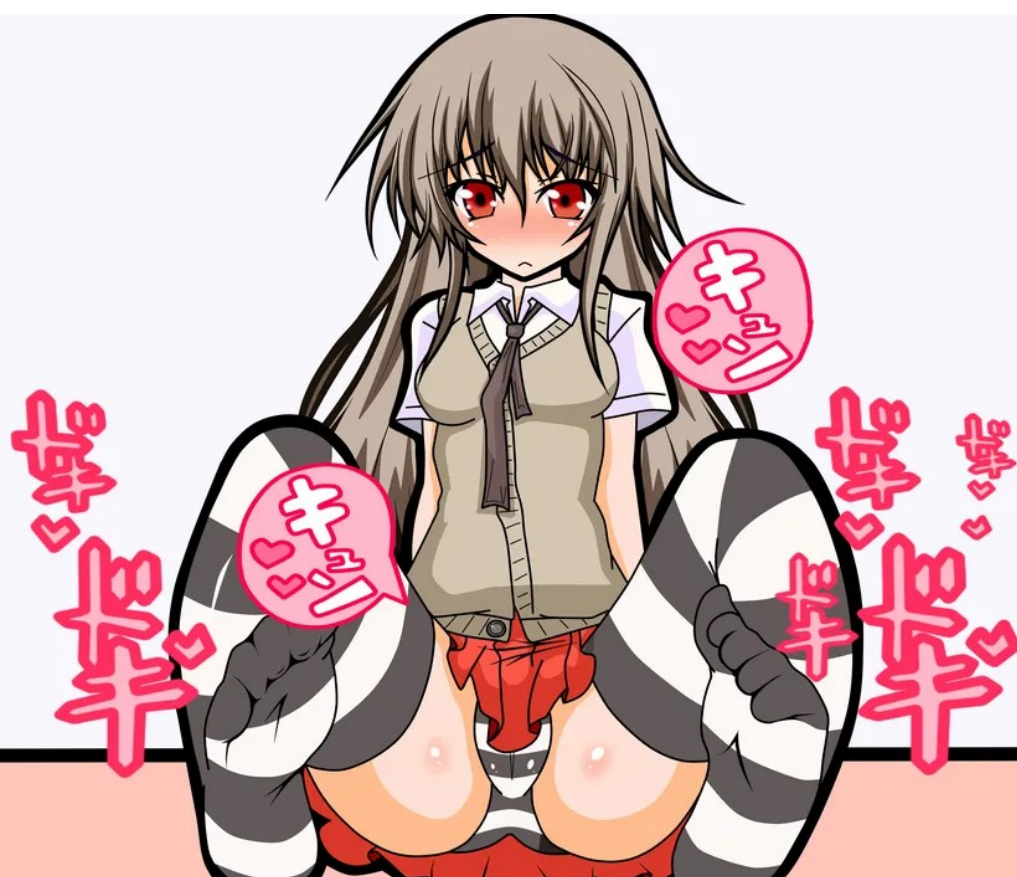
「んほおおおおおおおお」
じゅるるる



「あっ…すまん、つい夢中になっちまって」
「いいよ…ゲンのなら嫌じゃないし、少し嬉しいか
ら」
こうして、俺とユイの少し変わった関係がはじまっ
た。

「ええ…本当にこんなんでいいの…?」
「ああ、やっぱ男として一度は憧れるだろう?」
「足」キ」

「うん、やっぱゲンって性癖人では少しずれてるよね。エロゲのチョイスみて何てなくしてはいたけど」





「うぐ、お前だって結構でぎついのが意外で…」
「わーちよって！いつのまに見てたのさ！」
ぐにゅ！
「んおっ…」

「あれ...? ゲン?...へえ、ゲンって本当にこんな
で感じちゃうんだ...」
「ほら、シーコシーコ...気持ちいい?」
「ああ、そのまま頼む...」



「へへへえろしやうかにやいにやあゝ足で乱暴にされて喜んでるゲニのマソチニポいろっばいシコシコしてあげるね」
「こんなんで感じてるなんてゲニって意外でマソだったんだねえ」



「足でみちんちゃん、シコシコされて気持ちいい？」
「ほらほら、いっちにいっちに……キンタマもぐにゅにゅ」
「うっ……やはい、もうえ……」



ジュルルル♡

「わぶっ!?!」
「いっちやっただなあ、本当に足なんかで感じちゃっ
てたんだあ」
「うぐ…悪かったな」



「ううん、感じてるだけの顔みく見られて楽しかった
し」
「……ほらほらもう一回してあげるね」

「ちよっ、まだいったばっか…」
「だーめ。感じてる顔いっぱいみせてね」
あっ、なんかコイのってきてる…
「ほらほらシーコシーコ、おちんちん、こんなちっ
ちやな足に逆らえないなんて可哀想だよねー」



「タマタマだってちよってかいたら潰れちゃうんだ
よ？ほらほらぎゅうちゅー」
「あっ、ピクピクなってるいくの？いっちやうの？」
「ほら、おちんちん足で苛められていっちやえ…♡」



「あはは、いっぱいさせたね。いーいー」

じゅるるる

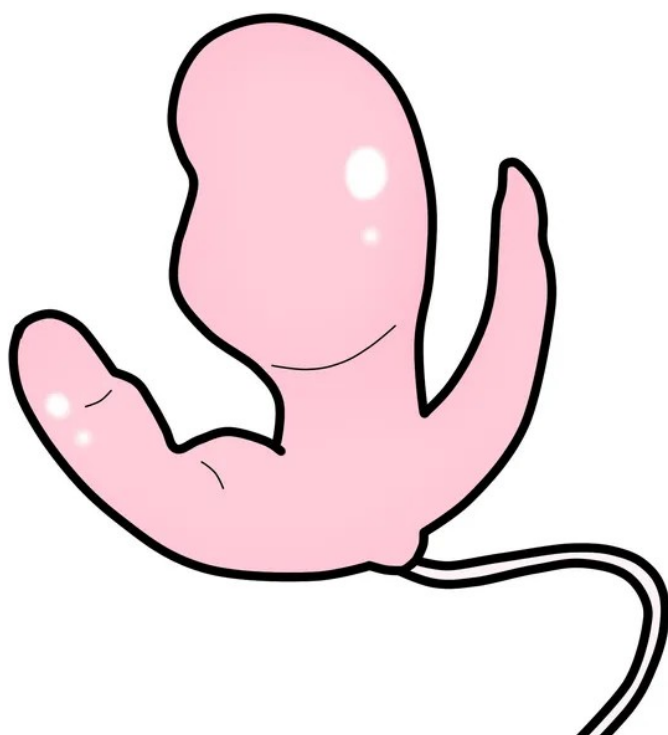


「ぐううう…」
「ん？ゲン？」
「うがあああ♥」
「え、なにっ？なにっ？」



「やられっぱなしは何かシヤクだ!」
「自分からやらせていて!?!」
「ていう事でこんなモノを用意してみました!」

大人のオモチャ





「うわぁ、理不尽かつ、どこでそんなモノを用意したのかと言う突っ込み所でぐちゃぐちゃだ」
「まあ、正直死ぬほど恥ずかしかったです」
「ああ……うん、頑張った……ね？」
頭を撫でてくるコイ。



「て言う事で、これを今からコイに使うからな」
「ええええ……やっぱ、そうなるわけ……?」
「なんだよ、少し顔がにやけてるぞ?少しは気になるんだろ?」
「まっまあ、ちよって興味はってなに言わせるのさ♥?」
「隙あり♥!」



ツプッ
「んぐいっ♡すゅっ♡すゅっです…」



「またない。スイッチ、オンって♡」
カチッ
「~~~~っ♡♡♡」



「はっはひええええ」
「おっ、おまんこ、震えひえ…あひいいい」
「ゲ、ゲンてめひえ、これにやのすぐイッちゃ…
んおほおおおお」



「おーいってるいってる。イカされた十倍はイカせてやるからな〜」
「ぞっそんなにや、そんなにやの…」
ソクソクソク
「こわれりゅうう、こわれちやうおおおおお」



「おほおおおおおお」
「んな事いって、期待した顔してるじゃないか」
「やらああ、いっちゃやああ」
「たあっぶり可愛がってやるからな」

一時間後

「はひっ……あひっ……はひい……」

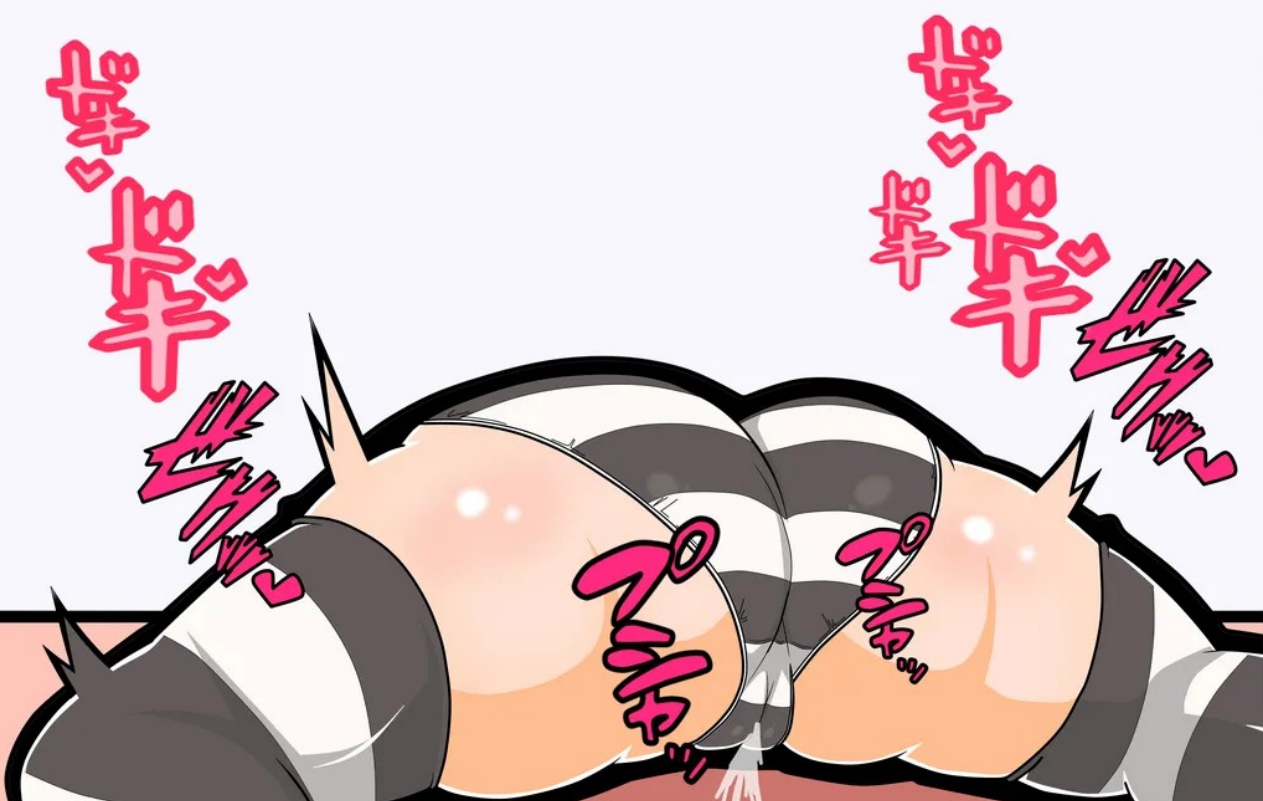


「よしノルマ達成だ」
「よくがんばったな」
そう言ってコイの頭をなでる



「まっひえ…いま、優しくされたら…」
ジヨロロロロロ…

「嬉しくておしっこもれちゃう、みにやいで、みにやいでえええ」



「大丈夫、嬉シヨンて可愛いや♥」
「恥ずかしいの♥♥」



「ねえ、ゲン…君ってほんとーに変態だよわ？」
「俺は俺の性癖に正直でありたいだけだ」



「自信満々で最低な事いってるよ！？まあ…：解らなくは無いけど、さすがに自分がされるてなるてかなり恥ずかしいんだけど」

流石にイヤがるコイに頼み込み、変態極まりない衣装を着せ、これまたいやらし格好で拘束する



「でも、興奮はしてるんだろ」
コイのパンツからは、まだ触ってもいないのにポタポタと愛液が滲み出してくる
「う……うう、いじわる……」

「やーてて...どこから責めよかな.....なあ、こ
い」
「わっ...なんか凄いイヤな予感が...」



「そう言えば、ここってまだいじって無かったよ
な?」
ツンツン
「ひやうう♥?ちよってまってそこは...」

ツプらうッ
「おしりのあにやああ、ちよって、まっひえ……そ
こ、きたにやいかりやあ」
「コイのなら汚くなんかないぞっ」
じゅぽじゅぽ



「ほひはおおおッぞ、それにや、お決まりの台詞はい
いかりやああ！じゅぽじゅぽすりゅの待って〜」
「でも、コイ。あっげえトロけた顔してるぞ？感じて
るのか？」
「うっ、うって、これにやのしらにやいかりやああ」



「はへっ、はへええ、おっおしり……んひい」
「めっ、抜いて、もう入らにやひいいい」
「あゝ、じや一氣にいくぞ」
「ひえ！？ちよっ、ゆっく…」

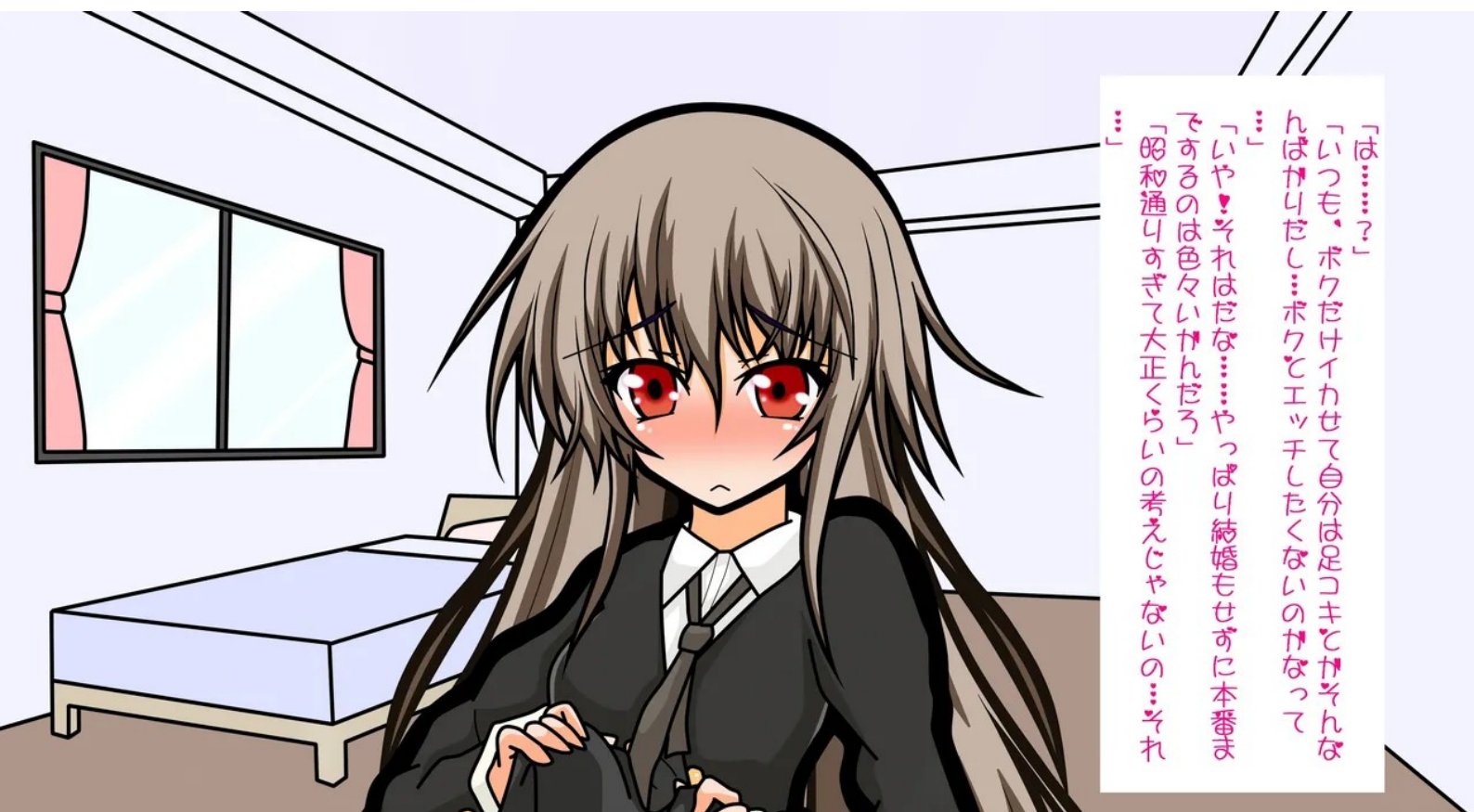


「ずぶずぶずぶ♡♡」
「んほおおおお♡♡」
「おしり、めくれりゆうう♡いくっ、いっちやう♡おしりでいきゆうう」
「あひええええええ♡♡」

そんなこんなでコイでの生活も其なりに長いこと続いて来たわけだが……
むずうう……
最近、なんか異様にコイの機嫌が悪い様子です
「あっ、あのコイさん……？ なにか悪いことしましたでしょうか？」



いや、心当たりはある。
アナル開発しようとしてたり、変態全開な衣装を着せたり、思い当たる事はかりだ
「おえ、ゲン」
「はっ……はい……」
「ゲンはボクでセックスしたくないの……？」



「は……？」
「いつも、ボクだけイかせて自分は足こきとかそんな
んばかりだし…ボクでエッチしたくないのになって
…」
「いや♥それはだな……やっぱり結婚もせずに本番ま
でするのは色々いかなだろ」
「昭和通りすぎて大正くらいの考えじゃないの…それ
…」

「いや大正だと夜這いの風習も残ってるし案外そうでもないんじゃない？」
「しろないよ！？っていうか、本番寸前までやって、今さら過ぎるよ貞操とか！？」
「……………そんなに、ボクに魅力ない？」



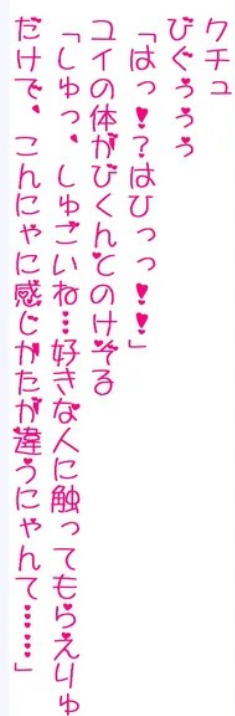
「……………んなことねえよ。お前以上なんて俺には高望みも程があるっての」
「それより、お前は俺なんかでいいのか？お前なら
「ゲンがいい」
「……………はあ。俺の負けだ。俺もコイ、お前がいい」



「触るや……いいんだよね……？」
「……君って、なんか変な所でへたしだよね」
「うるさい、コイだって女の子なんだから氣を使うだろ♥」



「オシリの穴とか遠慮なくかき回されたけど？」
「……あれは、あれだ」
「……はいはい」
「いっからな？」



「はっ♡？はひっ♡♡」

「しゅっ、しゅっいね……好きな人に触ってもらえりゃだけで、こんなに感じがたが違うにやんて……」

「……っ。悪いコイ、もう止まらないからな」
「うん……いいよ」
くちゅくちゅくちゅ♡♡♡

コイのなかに優しく、激しく責め立てる。



「んひいい♡♡はっはひえっ♡♡」
「しゅっっ、しゅっいいいいっこれにやのすぐ……み
ああああ」



プシャー
「いっいっちやっら……んほお♡まっまってゲン、
いま、いって、今いってりゅ…」

「あへえええええ」

な
っ
て
し
ゆ
か
り
や
あ
あ
あ
あ
あ
あ
」



なっ
てり
ゆう
ゆう
」

「りゅのおお!!」

「んほおおおおおおおおおおおおおおおお」



「はぁ...はぁ...ゲンだけズルい♥♥」
「はっ...?」
「ボクだってゲンを気持ちよくさせてあげたいの
に♥♥今度はボクがゲンを気持ちよくさせてあげ
る♥♥」
そう言うてコイは俺を押し倒す。



「ゲン、初めてあげるからね……慣れてないから
へたかもしれないけど……」
「んなん…俺だってそうだよ」

「嬉しい♪」
「……まあ、そうだな」

スプッ
「んっ……♡」
「コイ大丈夫か？」

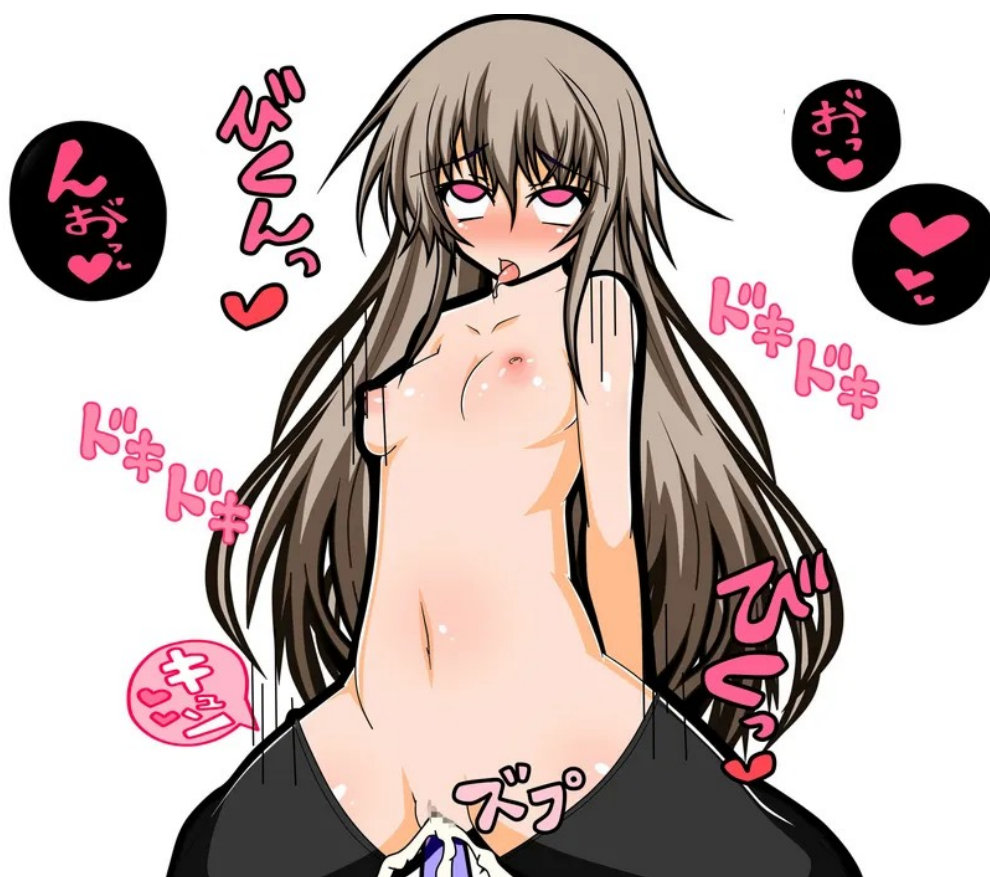


「うん、全然。やっぱり好きな人でだと初めてで
もいたくないってホントなんだね」
「動くよ……？」
スプスプスプスプ

「でっ、でっ？ きもちいいい？ ポクなおまんこ
ちやんてゲンのおちんちん喜ばせてあげられて
りゅ？」



「ああ、気持ちいいぞ。すぐでちまいそうだ」
「うん、いって大丈夫、ボクもあつていきばな
しだから、いっしょにいこう……」



「で、でる」
「いくっ、おまんこ、ラブラブセックスですぐ
いっちゃう♥」
「んほおやおやおやおやお」



「はあ、はあいっぱいできたね……もう一回きゅんか」
「もう、ホントにたまらないからな……」
「しつこいよ」
イタズラにコイが笑った。

END

おまけ

二時間後

「あええええ……おっおまんこ……もう、はいちにや……」

おあむ♡



「んおおお」
「でりゅ、精子でりゅらう」
「あへえええ」



翌日

「……………おは……………あれ♡♡?」

デニマス →



続く